

年少から小学6年生、そしてその先まで「長く役立つ“学び”のコツ」を語る SAPIX 特別教育対談を開催

6月28日(日)、SAPIX代々木ホールにて、「SAPIX特別教育対談」が開催されました。今回のテーマは、年少から小学6年生、そしてその先までを見据えた「長く役立つ“学び”のコツ」です。SAPIX YOZEMI GROUPの高宮敏郎共同代表、こぐま会代表の久野泰可先生、サピックス小学部事業本部長の溝端宏光先生が登壇し、それぞれの視点から教育のあり方を語りました。当日の講演と対談の様子をお伝えします。

特別講演

「魚を与えるのではなく、釣り方を教えよ」
みずから答えにたどり着く方法を習得する



SAPIX YOZEMI GROUP
高宮 敏郎 共同代表

最初に登壇したのはSAPIX YOZEMI GROUPの高宮敏郎共同代表です。冒頭では、サピックスキッズが「小学校受験対策ではなく、小学校入学後の学びの土台を育てること」を目的として」と説明。その後、入学前に身につけてほ

しい「学びのコツ」として、「魚を与えるのではなく、釣り方を教えよ」ということばがあるように、勉強も安易に答えを教えるのではなく、「どうすれば答えにたどり着けるか」という学び方を身につけることが大切だと説き、「サピックスではこうした学びを大切にしています」と強調しました。また、新幹線で見かけた、付箋やマーカーでびっしり彩られた受験生のノートを例に挙げ、「一見、覚えにくそうですが、学び方は人それぞれです。大切なのは試行錯誤を重ね、自分に合った学習法を見つけることです」と話しました。続けて、保護者の心得として、「できることは『学びの習慣化』です。また、子どもは物事をすぐ忘れるものだ」と理解し、繰り返し学ぶのが当然だと考えてください」と呼び掛けました。最後は、「学びの原動力は好奇心です。どうか子どもの好奇心を大切に育んでください」と来場者に語り、講演を終えました。

基調講演1

手を動かし試行錯誤して学ぶ
事物教育を軸にした教育を実践

次に登壇したのは、約50年にわたり幼児教育の研究を続けてきた、こぐま会代表の久野泰可先生です。「教科前基礎教育という考え方」をテーマに、幼児期の教育と小学校入学後の学習が切り離されている現状を指摘し、「その二つをつなぐ架け橋が必要です」と説きました。その架け橋となる、小学校以降の学びを支える「幼児期の基礎教育」を実践するため、こぐま会では独自の「KUNOメソッド」を展開しています。これは、「未測量(量の感覚)」「位置表象(空間認識)」「数(四則演算の基礎)」「図形(平面・立体感覚)」「言語(聞く・話す力)」「生活他(認識能力を育てる)」という6領域で構成される、実践の積み重ねから体系化されたカリキュラムです。久野先生は「ただし、教育の軸となるのは、ものを動かし、手を使いながら試行錯誤して学ぶ『事物教育』

「数(四則演算の基礎)」「図形(平面・立体感覚)」「言語(聞く・話す力)」「生活他(認識能力を育てる)」という6領域で構成される、実践の積み重ねから体系化されたカリキュラムです。久野先生は「ただし、教育の軸となるのは、ものを動かし、手を使いながら試行錯誤して学ぶ『事物教育』



こぐま会代表
久野 泰可 先生

と、ことばを通して思考力を育てる『対話教育』です」と説きます。実際に授業の映像を上映した後、「幼児が学ぶチャンスは生活のなかにいくつもあります。子どもに試行錯誤させ、みずから答えにたどり着くプロセスを大切にするのがサピックスキッズです」と紹介し、話を締めくくりました。

基調講演2

公式を先に教えず議論を重ねる
討論式授業で思考力を育む



サピックス小学部事業本部長
溝端 宏光 先生

続いて、サピックス小学部事業本部長の溝端宏光先生が登壇し、「“学ぶ楽しさ”を力に変える」をテーマに話を進めました。冒頭では、サピックスが創業以来「思考力」と「記述力」を高める指導を重視してきたことを紹介し、「そのためには『授業が楽しい』と前向きに学ぶ姿勢を引き出すこ

とが大切です」と強調しました。サピックスでは、低学年では単純な計算問題だけでなく、知的好奇心を刺激するパズルや推理の要素を取り入れた教材を使い、「まずは自分でやってみよう」を合言葉に主体的に取り組む姿勢を育てています。「失敗はつきものなので、保護者の方には良い意味で、失敗に慣れてほしいと思います」と溝端先生は語ります。また高学年では、三角形や台形の面積を求める際も、公式を先に教えるのではなく、既習の知識をもとに子どもたちが考え方を出し合い、最後に公式へと導く討論式の授業を実践していると紹介しました。最後に、溝端先生は「サピックスは基本を深く学ぶことを重視しています。それが問題解決能力につながり、さらに集団で学ぶことで多様な視点にも触れられます」と話し、「学びの本質は効率にこだわることではありません。寄り道を大事にしてください」とメッセージを送りました。

特別教育対談

学ぶ楽しさを力に変えながら
子どもの主体性を豊かに育てる

最後に、久野先生と溝端先生による特別教育対談が行われました。最初のテーマは「事物教育の重要性」です。久野先生は「ペーパーやワークブック中心の学習ではなく、①体を使い、②手を使い、③最後に頭を使ってワークブックに取り組むという3段階の指導が大切」と説明。さらに、「スーパーマーケットでお菓子の数を数える」といったように、手を使って学ぶ機会は日常のなかにも数多くあると伝えました。溝端先生も「事物教育や対話教育は、サピックスが重視する『思考力』の土台にも通じるものです」と話し、両者の教育方針に共通する実体験や対話を重視する姿勢を確認しました。

次に、「伸びる子の特徴は」という質問に対し、両者ともに「学ぶことが楽しめる子」「好奇心旺盛な子」と回答。さらに、久野先生は「子どもの一面だけで評価せず、多面的に見てみてください。ある場面では驚くようなリーダーシップを発揮することもあります」と語り、溝端先生も「勉強に限らず、観察力が鋭い子も伸びるタイプだと感じます」と続けました。このほか、「多面的な視点を持つ子」「結果から逆算して考える『逆思考』ができる子」なども挙げられました。

最後に「やる気を引き出すコツ」がテーマに。溝端先生は「結果だけでなく、努力の過程を認めることが大切」と話し、久野先生も「間違えたときこそ、新たな学びのチャンスです」と応じました。さらに久野先生は「いきなり難しい問題を解かせるのではなく、家庭でも『一歩先の、少し背伸びすれば手が届く問題』に取り組ませることが大切」と呼び掛け、対談を締めくくりました。



特別対談では、「事物教育・対話教育の重要性」「伸びる子の特徴」「やる気を引き出すコツ」「保護者の方へのメッセージ」といったテーマで意見が交わされました



映像や画像をスクリーンに映し出し、わかりやすい説明が展開されました